

令和5年3月18日

むすびらき読書会

北村透谷「厭世詩家と女性」(『北村透谷選集』勝本清一郎校訂、岩波文庫、1970)

### ●恋愛は人生の秘鑰なり

「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ、然るに尤も多く人世を觀じ、尤も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く恋愛に罪業を作るは、抑も如何なる理ぞ」

→恋愛は思想を高潔にする

### ●想世界と実世界

想世界→理性・希望 実世界→不調子な社会 想世界を救出するのが恋愛！

### ●詩人と女性性

詩人は女性を冷罵するが、その「繊細優美」を求める思想、その「神経質」「執着」という性情は女性的である

### ●厭世詩家に於ける想世界と実世界の相剋

義務徳義を知らないながら善美を求める理想を抱く少年は、複雑な実社会に直面し、「厭世思想」を抱く。「誠信」は「解脱」でなければ厭世思想に勝てない。

「偕て誠信の以て厭世に勝つところなく、経験の以て厭世を破るところなき純一なる理想を有てる少壮者流の眼中には、実世界の現象悉く仮偽なるが如くに見ゆ可きか、曰く否、中に一物の仮偽ならず見ゆる者あり、誠実忠信「死」も奪ふ可らずと見ゆる者あり、何ぞや、曰く恋愛なり、情は鬭争すべき質を以て生れたる元素なれども、其恋愛の域に進む時は、全然平和調美の者となり、知らず知らず一女性の中に円満を画かしむ、情人相對する時は天地に強敵なく、不平も不融和も悉く其席を開きて、真美の天使をして代て坐せしむ。」

→恋愛は、人生を「穢土」と見て呻吟する厭世家生来の激しい情を捉えて、過大な希望を抱かせる

### ●恋愛と社会

「恋愛は一たび我を犠牲にすると同時に我れなる「己れ」を写し出す明鏡なり。男女相愛して後始めて社界の真相を知る、細小なる昆虫も全く孤立して己が自由に働かず、人間の相集つて社界を為すや相倚托し、相抱擁するによりて、始めて社界なる者を建成し、維持する事を得るの理も、相愛なる第一階を登つて始め

て之を知るを得るなれ。独り棲む中は社界の一分子なる要素全く成立せず、双個相合して始めて社界の一分子となり、社界に対する己れをば明らかに見る事を得るなり。」

→恋愛が社会に取り込まれた形となる婚姻は「人を俗化する」が「人をして正常の位地に立たしむる」

→「婚姻の人を俗化する人は人を真面目ならしむる所以にして、妄想減じ、実想殖ゆるは、人生の正午期に入るの用意を怠らしめざる基なる可けむ」

### ●詩人と婚姻

婚姻は「想世界の不羈より実世界の束縛となる」ことで「人を真面目ならしむる」  
「怪しきかな、恋愛の厭世家を眩せしむるの容易なるが如くに、婚姻は厭世家を失望せしむる事甚だ容易なり。」

→社会の一組織となることを意味する「婚姻の歓楽」は、「社界の規律に遵うこと能はざる」厭世家の希望と想像を裏切り、彼等を「誠信と楽天」へは導かない

### ●女性と詩人との不調和

女性は「感情の動物」なので「愛を仕向けるよりも愛に酬ゆるこそ、其の正当の地位なれ」

⇔詩人は「頑物」で「世路を濶歩することを好まずして、我が自ら造れる天地の中に逍遙する者」

厭世詩家は男性の一挙一動を喜憂とする女性と調和しない。厭世詩家もまた最初は恋愛を理想の牙城とするも婚姻により実世界に繫縛されると感じる。

### ●恋愛・婚姻・死は「人生の順序」

「恋愛によりて人は理想の聚合を得、婚姻によりて想界より実界に擒せられ、死によりて実界と物質界とを脱離す」

「抑も恋愛の始めは自らの意匠を愛する者にして、相手なる女性は仮物なれば、好しや其愛情益発達するとも遂には狂愛より静愛に移るの時期ある可し、此静愛なる者は厭世詩家に取りて一の重荷なるが如くになりて、合歡の情或は中折するに至は、豈惜む可きあまりならずや。」

### ●女性の不幸

「嗚呼不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通弁となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで、寝ねての夢、覚めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ、うたてけれ。」